

踊ろ
うマヤ

有爲エンジェル
in angel

踊ろう、マヤ

一九九〇年二月二日 第一刷発行

著者——有爲エンジェル

©Li Angel 1990, Printed in Japan



発行者 野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四五—二二

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円（本体一二六二円）

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

踊ろう、
マヤ

装
幀

菊
地
信
義

Fの指はますます深く私の頸に喰いこんできた。息もつけず、それでも無抵抗のまま、自分におおいかぶさるFの貌を、私は下から見上げるばかりだった。

髪の毛を逆立たせ、両眼を憎悪で血走らせながら、Fは路地の向こうにまで聞こえるほどの大声で私をののしってくる。

まだ朝の六時を廻ったばかりだ。聞き慣れない英語とはいえ、明らかに怒気を漲らせた罵声に、好奇心あふれる近所の住人たちは、いまだにだけ刺激的な朝を迎えたことだろう。それを想うと、頸を締められる苦しみや恐怖におののきながらも、私はやりきれない気持だった。

「おまえはマヤの死を、なんだと思ってるんだ。おまえも、おまえの狂った友人^{フレイター・フレネ}も、みな地獄へ墜ちろーっ、酒吞んで酔っ払って、騒ぎたいだけ騒ぎやがって、あんなめっちゃくちゃな法事をやって、マヤの魂が安らぐとでもいうのか。テメエら、日本の畜生ども、死

をいったい何だと考えてるんだ、世の中なめるのもいいかげんにしろ、このクソツタレ！」

感覚という感覚が、いまにも闇の底に押しつぶされてしまいそうなほどだった。……が、もうだめだ、と覚悟したその直後、私の頸は再び自由を得、両手はずしたFはそのまま自分の頭を抱えこみながら、「ウォーッ！」と、天井へ向けて凄じい声をあげた。そのすきを狙い、跨るFを押しのと、私は素早くベッドから床にころげ落ちた。

Fは髪を掻きむしりながら、再びあらんかぎりの声で叫ぶ。

「おれを……おれを禪寺^{ゼン・テン・ジ}へ連れていけーっ、テメエらの狂乱ぶりを見るために、おれはわざわざ、こんなところへ来たんじゃない！」

これがFの気持なのか、これが娘の死に対するFの偽らざる気持だというのか。悲しみ、怒り、呵責、恐怖、その何れもかもを、とりあえずは妻である私にぶつけ、責め立てる以外、Fはそこから逃れる術はなかったのだらうか。

妻が四歳の娘を伴って自分と別れるために英国を去り、三年後にその娘が、妻の母国の日本で交通事故に会い死んだ。憧れの日本をいつか必ず訪れてみたいとは願っていたもの

の、まさかこんなことのために来るなどとは、Fは予想だにしなかっただろう。そのうえ昨晩のあの、あまりにも騒がしい法事——たしかに事情を知らないものが途中から参加していたならば、何かの宴会と勘違いしかねないくらい、それは賑わしいものだった。

娘の死を知らされ、日本へやってくるまでの間、こらえにこらえていたさまじまな感情を、Fはいまようやく、このような形で吐き出すことができた。しかし私は私で心身ともに疲労困憊の極に達していたところへ、頸を締められたことへの恐怖や怒りが重なり、Fの混乱しきった感情を理解しながらも、それを受け容れてやれる寛大な気持など、どうても持てなかった。

それにしても悲しい誤解だった。他の人はともかく、この私までが昨晩、娘の四十九日を忘れるくらいに本気で、彼らとのやりとりに戯れていたなんて……。忙しいなか、わざわざ来てくれた人たちに対し、自分の悲しみだけを優先させないためにも、あのように入るまわざるをえなかった私の演技が、七年も夫婦をやってきたFには、なぜ理解できなかったのだろうか……と、そのことがなによりも恨めしかった。

英国のミュージシャンであるFは、コンサートなどを控えていたため、葬儀と初七日にはどうしても出席することができなかった。それならいっそ四十九日に間に合うように来てほしいという私の要請で、その前日になんとか来日可能となったわけだ。

私の友人とFが対面するのは、今回が初めてだった。マヤの父であり、私の夫であり、英国のミュージシャンであるFは、その日のメイン・ゲストとでもいった面持で、しばらくはにこやかに彼らと談笑していた。顔の下半分を黄金色の髭でおおい、ますます薄くなった後頭部を補うかのように、むりやり伸ばされた肩の下まで届く髪の毛——年齢的に、六〇年代のあのヒッピー・ムーヴメントに間に合わなかったFからは、いままさに、時代に逆らうかのような、それまでの抑圧や鬱憤を、なにがなんでも吐き出そうとする気が感じられた。そんなFが長い手足を上手に折り曲げながら、狭い部屋の中であぐらをかいている姿は、案外似合っていた。もうずいぶん前から、彼はこのようなところで生活しているかのようにだった。

日本へ帰ってきてからさっそく購入した中古の木造家屋、その二階屋を、当初私は予算のゆるすかぎり好きなように改造した。とくに一階はかなりの範囲に手を入れた。

まず二間続きの小さな畳部屋と、それにつながる台所との各しきりを全部取り払い、ワ
ンルームとした。部屋のほうにはカーペットを一面に敷き、部屋と台所との間にはカウ
ンターを築いた。

台所には金色の壁紙を貼り、ワインカラーの木製ユニットを上から下まではめこみ、当
世風なキッチンとした。薄暗いトイレは壁も便器もすべてピンクに統一した。風呂場はタ
イルを貼りかえ、浴槽をおもいきり大きくし、脱衣室のほうはローマ字のプリントされた
派手な壁紙が、天井と四方の壁全部をおおいつくした。

ところがここまで変身させられながらもなお、日本の古臭い家屋という印象は免れな
い。低い木の天井や、鴨居、押入れ、障子戸などが、そのままに残されていたからであ
る。しかしそんなちぐはぐがかえって、十年ぶりに日本へ戻ってきた私には心地良かつ
た。そしてそれをさらに強調するかのように、長椅子とこたつ、ポップな飾り物とアン
ティーク家具などが、気の向くままに配置された。

この家に足を踏み入れるなり、Fはしばし眺めまわしながら「いいねえ！」と呟いた。
ところがこれまでに訪れた日本の友人たちといえば、ことばの与えようがないといった当

惑した表情を見せるばかりで、こんな改造家屋に共感を示したものだ。一人もいない。それだけにFのさり気ないことばは嬉しく、空港で再会して以来ようやく、自分たちがマヤという娘を共有した夫婦であることを、多少なりとも実感した。

この、やや強引にワンルームとされた狭い空間に、マヤが亡くなって以来何度か、大勢の人間が詰めこまれ、四十九日のその日も、ぎゅう詰めになった彼らはかろうじてみつけた床やソファの空いているスペースに、膝を寄せあつて坐りこんでいた。

法事の厳肅さから彼らが次第に解放されていったのは、酒とFの存在だった。また私とFへの慰めのようなことばを胸の奥でつかえさせているだけに、その反動としてふだんは思いもつかないようなジョークが、ここぞとばかりに出てくる。そしてそのつど彼らは腹を抱えて笑う。やがて相手への無節操な批判やからみが始まったり、一方ではこれを機に知り合った男と女が、やや場違いな雰囲気で戯れ合ったり……。

たしかに度を越える喧しきは、葬儀の後や初七日のときにもみられた。私自身それまでにそのような儀式には、外国でも日本でも出席した経験がないので、いったい何が標準なのかということは判らなかった。それでも私の親しい友人たちが、娘を六歳で喪った、私

の突然の不幸に対して、どう対処したらよいか見当もつかないでいるという、彼らのそんな氣遣いだけはよく理解できた。そしてその混乱がときには、はめをはずした言動へと彼らを駆り立てた。場合によっては一緒に笑って笑いを立てたり、あるいは好い加減にしてほしいという煩しさを抱いたり……。ところが、おかげでその間ばかりは、悲しみや苦しみから、僅かながら氣持を紛らわされている自分に氣がつくこともあった。

今朝ベッドの上で眼を醒ましたときには、必要な儀式をひととおり終えたということ、私はとりあえず安堵していた。ふと、下の布団で寝ているFに視線を注いだ。私より遅く床についたのにもかかわらず、Fはすでに眼を開けていた。昨晚私は最後まで彼らにはつきあわず、途中で独り二階へ上がって寝てしまった。疲労が限界に達し、酔った友人や、次第に機嫌の悪くなっていたFの相手ができなくなったのだ。

両腕を頭の後ろで組み、仰向けになっていたFは、充血した両眼を大きく見開きながら、吐く息も荒く、何やら異様な氣配を伝えていた。厭な予感に駆られながらも、私は「どうしたの？」と訊かずにはいられなかった。

そのことを待ちかねていたかのように、Fは勢いよく布団をはねのけ、ベッドの上に跳び乗ってきたかとおもうと、叫び声をあげながら、いきなり私の頸を締めたというわけだ。

「だれがいったいマヤの話をしていたというのだ。日本語が理解できなくなつて、そのぐらゐの見当はつく。おまえら最初から最後まで、ワルのりしてただけじゃないか」

ゼン・テムプル
禪寺へ連れていけ！

と怒鳴り散らした後、Fは再び喰いつかんばかりの勢いで私を攻撃してきた。

たしかに今回、マヤについてことさら触れられることはなかった。しかしそれまでに、私と彼らの一人ひとりが対面したときには、すでに充分に語りつくされていたのだ。むしろ大勢の人間が一堂に会した際など、私自身マヤのことを話題にされればされるほど、かえって彼女の死が穢されるような気がしていた。

一方マヤの死の直後から、親身になってあらゆる雑事をとりしきってくれたもつとも親しい友人たち——忙しく動き廻る彼らの姿から、私はときに祭りのときの、昂揚した気分にも似たエネルギーを感じとっていた。あるいは深い憐憫や同情が行き場を喪って野放図

に発散される、とても言ったらよいか……私やマヤとの関係が深いものたちにとくにその傾向が見られ、ときに彼らは昂まりの延長から、私の最後のプライヴァシーにまで足を踏み入れることさえあった。

それでも私は赦さないわけにはいかなかった。なぜなら彼らの中に悲しみがあるのも事実だったし、何はともあれ自分の仕事を犠牲にしてまでも、彼らはマヤと私のために、力のかぎり尽くしてくれたのだから。

最初友人たちはFへ心から歓待の意を表し、彼らの話題も大方Fを中心に展開されていた。そしてまた周囲の関心が自分ひとりに集中されることに馴れきっているミュージシャンも、この状況には少なからず満足しているようにみえた。つまりこの間娘の死が終始胸に去来し、彼がその悲しみにのみ打ちひしがれていたとは、到底考えられないのだ。

酒が廻るにつれ、彼らの意識は次第に分散し、Fの存在もそれに並行して稀薄になった。マヤのことよりもFのことよりも、自分自身が解放されることのほうへ、彼らの関心が移ったのである。

日本語を解さないFだけが、次第に取り残されていった。彼の顔が明らかに焦燥の色を

浮かべ、救いを求めるかのように、その視線が何度か私のほうに向けられた。それに気がつきながらも、私は途中から通訳の役割をほとんど放棄してしまった。友人たちと日本語でやりあうことのほうに、すでに心が奪われていたのである。

彼らに対しても、私はFと同様にやはり氣遣いを示さなければならなかった。また昨晚に関しては、そうしているほうが楽だったからという思いがあったのも否めない。

マヤが亡くなってから四十九日のこのときまで、毎日人の出入りが絶えず、その間——ときには私にもマヤにも関係のないトラブルにまで巻きこまれ、睡眠不足が重なるなかで、私はほとほと疲れきっていた。それでもFを迎え、送りかえすまでは、なんとか持ちこたえねばと、氣の張りづめの日々を過してきた。

最初から最後までFに付きつきりで通訳をすることなど、まず不可能だった。しかし途中で明らかに放棄したことについては、他にも理由がある。とくに酔いが廻ってきてからは、それがはつきりしてきた。

みながだれかの冗談に腹を抱えて笑っている最中でも、Fひとりが笑うに笑えず、顔を強張らせているのを見たとき、氣の毒に思いながらも、どこかで私は小氣味のよきを感じ

ていた。マヤが死んでからというもの、Fに対する否定的な感情はいつさい抱くまいと決めていたにもかかわらず、酔いと疲労がそれを覆していた。

英国でFと共に社交の場に出ているとき、私はいったいどれだけこのような孤立した状況を味わってきたことだろう。それは必ずしも彼らの言語が理解できなかったからというのではなく——私の英語は次第に上達していったわけだから——むしろ彼らが幼い頃から分かちあってきた文化に、私ひとりが馴染むことができないという、そんな淋しきからきていたのではないかという気もする。

Fと喧嘩したところで、近くに帰れる家があるわけではないし、それにまた周辺の大方は、Fと幼児体験などを共有できる人たちであったり、音楽家として成功した彼を誇りに思う親類や友人やファンであったりしたわけだ。

Fはおそらく最後まで、私のそんな孤独を理解しなかっただろう。それどころか彼は、私の見せかけの強さばかりに惑わされ、それに頼りきるか、あるいは気圧されるか、腹を立てるかしかなかったのだ。

英国に住めば住むほど、またFと結婚してからというものの、私は周囲——とくに男性に

対して、ますます攻撃的アグレッシブになっていったところがある。たとえばタクシーに乗っても、運転手と喧嘩をしなかったことがないというくらいで、そのたびに怒りを漲らせながら家に帰ってくる。Fはあきれ、しまいには友人たちへの笑い話のタネにしていたほどだ。不思議なもので、自分がアグレッシヴである時期には、必ず無礼でヤクザな運転手に当たったり、非常識な友人にばかり巡りあったりするという傾向がある。

いま思えば、当時の私の攻撃性は、明らかに孤立感や淋しきの裏返しであったということが解る。私が英国を去ったのは、Fと別れることだけが目的ではなかったようだ。自分が外国人として特別あつかいされる——これも差別のもうひとつの表われなのだろうが——毎日に、ほとほと厭気がさしてしまったからということもある。

考えてみればこのような孤立感に陥ったのは、結婚してからのようで、それ以前の私は日本人の女性として菜食レストランを経営することなどに嬉々としていたし、男に對してだって、ことさら憎しみを抱いていたわけでもなかった。

それにしても昨晩は、これまでも増して、みなが浮かれていたことは事実だ。しかしそれは何よりもFが来たからということにあるのだ。彼らはマヤの父親であり、私の夫で